

大 学 図 書 館 問 題 研 究 会 京 都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橋女子大学図書館 小林倫道気付
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

同志社に36年3ヶ月勤めて

竹本 文夫

<面接で好き放題しゃべる>

私が就職した1959年は丁度今年のような就職難の年でした。高校のときに父親をなくしていたので保護者が母親のみでは使い込みなどの際の財政的保証がないということから金融・証券関係では書類審査の段階でアウト。1回生のときドイツ語と資本論と外国文学の古典に熱中し、12単位しか取らなかったため、余裕がなくて教員や司書などの資格は一切取らずに卒業した。一層就職が狭き門になっていた。さらに、成績が科目により開講以来の最高点からぎりぎりの60点まで極端にアンバランスになっていたことも不利な条件だった。当時企業は協調性のある平均的人間を取ろうとしていたからである。

こうした状況のもとで秋11月末になっても就職がきまらず、大学院でもいこうかなと思っていたときゼミの教授から「同志社が職員を募集するから応募しないか。夏休みや春休みはあるし、時間中に講義の受講もできるから職員のまま大学院へも行ける。こんな結構な職場はめったにない。」といわれ、1~2年の腰掛けのつもりで応募した。2名採用のところ 200名(?)位の応募だった。どうせだめだろうと期待していなかったが、ペーパー試験の結果8名にしぼった中に入り、面接の通知が来た。この段階でも大学の職員、特に同志社の職員というのに何ら魅力を感じていなかったの、面接では好き勝手なことをしゃべった。同志社の現状や経営について何か意見はないかという質問に対し、卒論で図書館を利用しようとしたが、役に立つ蔵書がほとんどなく、カウンターの図書館員に相談したが、ピントのはずれた対応で全くものの役に立たない、また、授業料値上げ問題での学生に対する対応はダマシ以外の何者でもないなどいくつか事例をあげて批判した。

その時は知らなかったが、面接官の中に当時図書館整理課長だった小野則秋氏がいて、ドイツ語がかなり読めるということひそかに私を自分の職場に採用したいという意向を持っていたそうである。私は3回生と4回生で2年連続、ゼミの教授の独書講読を取っていた。学生は私一人。それで教授は経済のある教員をそこにいれ、その教員に合わせた講読を進めた。それでついて行くのが余りにもしんどかったので後半ほとんどサボってしまった。教授はそのことについて私にすまないと思っていたようで、その埋め合わせもあって、私の語学力を実力以上に図書館の小野氏に吹き込み、強力に推薦してくれたようであった。こうした幾つかの偶然の幸運に恵まれ、図書館の職員に採用された。

<職員のことを知らない教員>

さて、就職してみるとゼミの先生から聞いていた労働条件と現場の事情は大違い。夏休みはあるにはあったが、全部休みではなかった。春休みは全くなし。時間中に講義を聴けるどころか高卒の人が時間外に二部へ入学するのも大学は歓迎しないという教育機関にあるまじきありさま。図書館員が図書館学の講義を時間内に受講することも不可。まず最初に、ここまで教員が職員の実態を知らないことに驚いた。これが私が最初に知った教員と職員の違いである。もちろん彼は、図書館および図書館員の実態については、学生だった私よりも知らなかった。閲覧はひまな職場で時々請求があれば本を取りに行く。整理は遊び半分でもいいかげんな分類をしていけば良い。どうせ大学の中ではとにかく存在すればいいところ。この程度の理解であった。

<まず分類・件名係に>

こうして2ヶ月前まで図書館員になるなど夢にも思っていなかった私が成り行きでライブラリアンになり、分類・件名係というところへ配属された。

同志社は大学では全国的にもめずらしい件名目録を備えていた。小野則秋氏の持論で目録は和洋混配。和書は分かち書きによるワード・バイ・ワードで洋書と一緒に繰り込んでいた。目録規則は和洋統一のNCR1952年版。この規則は、青年図書館員連盟が戦前から戦中の約十年かけてつくった「日本目録規則 昭和17年」の性格をある程度引き継いだもの。小野氏は青年図書館員連盟で活躍した人であり、その和洋統一の目録規則制定に際して大きな役割を果たした人である。同志社では件名はBSHを基本にしなが、独自に標目を追加、参照及び逆参照のカードをつくって体系性を付加するようにしていた（逆参照は事務用目録のみ）。

同志社大学図書館の整理では、和書目録係、洋書目録係、分類・件名係、函架係（書架記号を付ける係）、目録編成係からなっていて、本はこの順に流れていた。図書館学を取っていなかった私は分類や件名に往生した。また、目録の知識が全くないため、件名は何が何だかさっぱり分からなかった。特に件名標目の形式が分からなかった。また、言葉というものに関する知識もなく、時代や地域（関東と関西）、年齢によって言葉が違うことについて、利用者の立場からどう処理したら引きやすい目録になるかなど全く考慮の外であった。とにかく毎日百冊前後こなし、少しずつ経験を積み重ね、何となく分かっていくという原始的な方法でおぼろげながら習得していった。初心者で分かっていないためかえって量をこなしたので私の付けた件名や分類の監査をした係長は大変だったと思う。

そのうち日本語というものの性格を理解しようとして日本文法の本を読み始めたが、驚いたことに言語、特に日本語というものをどう理解するのかが根本的に異なる二つの学派があり、言葉の最小単位である「単語」の概念が全く違っていた。一つは西欧の文法学を日本語に当て嵌めようとした橋本文法、もう一つは、日本で、特に江戸時代に積み上げられた文法学の到達点をできるだけ尊重しつつ西欧の成果を取り入れようとした時枝文法である。目録の立場からは時枝文法の方が役に立った記憶がある。余談だが、大学の入試ではどちらの立場で答えても正解だそうである。

分類についてはメリルの『分類規定』をある程度勉強した。しかし、現実に本を分類するとなると中々分からず、鉛筆をコロガラして決めたことが良くあった。こんなことでは困ると思い、目録について一から教えてもらっていた服部純一氏に相談したところマーガレット・マンの『目録分類入門』をぜひ読めと言われた。ただ、当時この本は、翻訳が出ていなかったため、原書で読まざるをえず、時間がかかったが、かえって精読ができて良

かった。この本を読んで初めて「なぜ目録規則や分類規定が必要か」が分かった。そして規則は膨大な量があるが、どういう考え方が基本になっているか、原理原則にあたる規則はどれとどれかを初心者にも良く分かるように解説していた。今でも私の図書館学の知識はこの本から得たことが、基礎となっている。

<目録分類の改定・標準化>

同志社大学図書館の分類は、同志社独自のDDC分類表によっていた。しかもそれが何度か改定・展開されていて、過去に整理済で版の異なる同一作品が来た場合、すべて過去のものを展開した分類に訂正していた。そのため毎日毎日訂正伝票を発行した。すごい量だった。また、目録もNCRの1952年版では、到底処理できず、和書はその後改定準備が進められていた和漢書用のNCR [案] ? を、洋書はALAを補助的に準用していた。その為の訂正もすごい量になっていた。そして分類、目録ともそうした処理の仕方が限界になり、分類はNDCに、目録はNCR最新版を基礎にと整理方針の大転換が日程にのぼってきた。就職して5年目だった。

<勉強になったルベツキー案の検討>

目録の改定準備は、服部純一氏、帆足正則氏それに私の3人が主として行なった。前述したように服部氏には、それ以前から目録や参考図書の使い方について一から教わった。私にとって最大の恩人の一人である。

さて、改定の基本方針として、先ず同志社特有の和洋混配は引き継ぐ、件名目録は廃止する、そして目録規則はNCRを、分類はNDCを採用することが全館的に確認された。

それを受けて私たち3名は目録の改定準備に入った。NCRの1952年版と1965年版案との対照表の作成、補足としてALAの該当規則の検討、和洋の統一性の保持など検討課題は基本から細部に涉って多く、大変な作業であった。しかし、最も困ったことは、丁度その頃ALAも改定が日程に上っており、いくつかの改定案が出されていて、どれが採用されるか決まっていなかったことであった。我々の作業日程では、ALAの決定を待てなかった。そこで当時一応有力視されていたルベツキー案の検討に入った。

ルベツキー案は人名などの標目の形式を、フルネームではなく「最も良く知られた形にする」というのが大きな特色であった。だから作家エリオットの標目は、Elliot, Thomas Stearnsではなく、Eliot, T. S.となる。この考え方は利用者中心の目録という点から見ても大変優れたものと感動した。彼の案はこの思想で細部に至るまで貫徹されていた。

しかしこのルベツキー案も日本語訳がなかった。やむをえず私が訳すことになった。1963年から64年にかけての年末年始はこの翻訳に没頭し、殆ど好きな酒も飲むヒマがなかった。初出勤の日に挨拶もそこそこに、NCR65年版(案)の条文に準拠すべきルベツキー案の条文を挿入した竹本試案を必死でコピーしたことを今でも良く覚えている。4月には新しい目録規則で整理を始めることになっていたのだから、改定準備は大変遅れていたわけである。実はこうした事情のため、教職員組合の副書記長をしていたのを、63年秋に辞任し、一定の批判を組合から浴びたが、背に腹は変えられなかった。

ルベツキー案の翻訳は、洋書目録というものを、より深く理解するうえで最高の勉強になった。その後ALAはルベツキー案を採用せず、私たちが基本方針とした目録の標準化は、結果として洋書部分ではならなかったが、大変な勉強になったので私個人としては換

討をただけ得をしたと今も思っている。

整理の業務も分類・件名係というのがなくなり、係員はそれぞれ和書目録と洋書目録に吸収された。私は洋書目録係となった。

<再び組合活動に専念>

目録・分類の大改定後数年して新目録がほぼ軌道に乗ったころから再び組合運動に目が向き、68年、69年の大学紛争時代は三役を歴任した。特に69年は大学の大半が封鎖されるといった状況のもとで書記長として全共闘批判、暴力排除、封鎖解除の方針を同志社の組合として初めて提案した。まず三役会議。「私の安全はどう保証してくれるのか」とか「全共闘との対決は理屈では分かるが、とにかく怖い」といった本音の発言が出るまで8時間行ない、最終的に全員一致で意志統一した。そして執行委員会に提案。やはり延々と議論が続き、日付が変わってしばらくして、ついに反対していた人も採決してくれと言いだし、やっと○×の秘密投票で採決。反対1、保留2、あとは全員賛成という圧倒的多数を獲得した。そして職場討議を重ね、臨時大会でこの方針は確立された。組合の運動が、紆余曲折を経ながらも、同志社の封鎖解除に大きな役割を果たした。

この大運動で体を痛めてしまい、数年静養を余儀なくされたが、75年にまたもや書記長に就任。今回は組合結成以来初のストライキを提案した。目標は大幅賃上げ、暴力排除、封鎖解除・学園の正常化など。学内は賛否をめぐって沸騰。スト権確立のための臨時大会は、病気や出張などの人以外は殆ど出席するという空前の出席率であった。激しい論戦の末採決。残念ながらスト権は、全代議員（出席者ではない）の4分の3以上という規約のため、出席代議員の67%をこえる賛成を得たが確立しなかった。しかし、この賛成率は多くの組合員に確信を与え、組合の威信は大きく高まった。

<紫式部との出会い>

書記長在任中の69年に10年いた整理から閲覧へ配転になった。組合活動が忙しくてカウンターに立つ時間が非常に少なかった。夜の当番もしょっちゅう人に代わってもらっていた。そのため時間がたつにつれ現場から私の勤務状況に対し批判が出て来た。スト権提案の翌年再び身体具合をそこねたのを機に組合役員その他を殆どやめ、以後図書館現場の仕事に専念するようになった。

それから約10年、体調もようやく回復してきた頃、京都国公婦人協退職者準備会が源氏物語を読むにあたり、講師に南波先生を紹介したことから源氏に関わるようになった。もともと高校のとき、図書館に通って読んだことはあったのだが、その後すっかり遠ざかっていた。それが静養を余儀なくされていたので再び時々目を通したり、妻と内容について話あったりしていた時でもあった。また、レファレンスでも国文の学生からしばしば源氏のことでも悩まされていたので自分にとっても渡りに船だった。

85年5月から月1回の読書会が始まった。先生の講義を聴くうち紫式部の素晴らしさ、ナウさに引き込まれ、夢中になり、明けても暮れても紫式部のことを考えるほどだった。この読書会は95年10月現在まだ続いている。

実は読書会を始める2年ほど前から、レファレンスで必要に迫られ、紫式部・源氏物語関係の文献目録を収集しはじめていた。文献目録を2部コピーし、文献1件づつカードに切り張りしていた。カードは、一つは著者順、もう一つはタイトル順。内容の項目順のも

作りたかったが、各文献目録はそれぞれ違う仕分けになっているため、現物に当たる必要があるのと、専門家でないと項目の作成や仕分けが出来ないので諦めた。

1868年(明治元年)から1967年迄で約7千タイトル。ところがその後の方が多くは間違いないので総件数は2万タイトルをこえると推定していた。丁度7千タイトルをカードに切り張りした頃南波先生の読書会が始まった。優れた本や論文は極めて少なく、一方書誌作成の手間と根気は膨大なものであり、うんざりし始めていた頃だった。先生の話聞き、優れた関連文献を読んだりし始めると時間ももたないで書誌作成を続ける気がなくなり、ついにやめてしまった。ただし、念の為に付言するとこれは書誌作成一般がつまらないということではなく、私が手掛けた対象が余りに大き過ぎて一個人ではとても無理だった、ということである。ライブラリアンにとって書誌作成ほど勉強になるものはないことは、私の幾つかの書誌作成の経験からして間違いないことを強調しておく。

『源氏』に深入りしたお蔭でライブラリアンとしても大きな収穫があった。一つだけでも主題に詳しくなると、学問とはどういうものか、研究はどのように行なわれるものか、文献調査の際どんなことに注意すればよいかなどがある程度分かり、そのテーマ以外にもかなり応用がきく。

<大図研に入会 — 支部委員会は生きた図書館学勉強の場>

源氏の読書会が始まって1~2年した頃(1980?)会員倍加運動の一環として大図研京都支部は同志社へやって来て説明会を開いた。私も誘われて説明を聞きに行った。確か篠原さんと沢井さんが説明したように思う。この説明会で私を含め5~6名入会し、それ迄帆足さん一人だった同志社にも班が結成された。

班会が月に1回昼休みに開かれ、支部委員会の報告を受けていた。いつも京大の竹村さんの名前が出ていたのでどんな人だろうかと思った記憶がある。報告は、私学にいるとうい国立大学や文部省の動きなどがあって中々興味深かった。

そのうち支部委員をやってくれといわれ、断わりきれなくて引き受けてしまった。ところが支部委員会に参加してみると、ナマの討論なので班会で報告を聞くよりずっと詳しい、面白い。何より生きた図書館学の勉強になる。だから万障繰り合わせて参加した。

<衝撃を受けた教員面接>

大図研に入って一番大きな収穫は、85年に竹村氏が提案した「教員面接をして教育研究の実態を知り、教員との協力共同を迫る」ことを受け、教員面接を行なったことだった。面接を行なったのは約40名。1人1時間から2時間。まじめな大学教員がどんなに身をすり減らして教育に打ち込んでいるかは想像以上であり、大きな衝撃を受けた。

教員は、どれだけ教育にエネルギーと時間を費やしても研究者としての業績には何のプラスにもならない。それでも彼等は研究との矛盾に苦しみながら教育に莫大なエネルギーを注いでいる。私は、自分の仕事の仕方の甘さを思い知らされた。

学生の図書館利用の動向を基本的に支配しているのは教員の教育方針だということがよく分かった。どういう文献が学生にとって必要かは、学生の背後にある教員の教育方針から発生してくる。だが、学生の具体的な個別ニーズは揺れ動く。だから学生の直接の具体的な要求よりも教員の教育方針を詳しく聞くほうがはるかに正確に図書館は対処できる。確かに教員は学科登録の案内に参考文献を公表はしている。しかし、実際に講義を進めてい

く中で学生の水準や関心に合わせて具体的な参考文献は変わっていく。やはり教員の基本的教育方針を具体的に詳しく知ることが重要である。

教員面接を行なうことにより教員とのつながりも一層深まり、收書やレファレンスなど分からないことの問い合わせが大変しやすくなった。大学は、教員、院生など各分野の専門家の集まりであり、図書館が彼等の知識を活用しない手はない。

<威力抜群の大図研ネットワーク>

大図研に入って初め数年は、同志社の班会には参加したが、全国大会はもちろん、京都支部の例会や総会などにも全く参加しなかった。支部委員になってからは支部が企画する集会に全部参加した。また、近畿五支部合同例会や全国大会にも欠かさず参加。さらに数年して全国委員になり、これも殆ど参加した。こうした各種会合で得たものは、1回だけではよく分からないが、積み重なると極めて大きな財産となった。しかし、大図研で得た最大のものは、こうした知識の獲得もさることながら、各種会合で多くの人と知り合いになったことである。分からないこと、困ったことなど何でも大図研の全国の仲間と気軽に相談し、数多く解決して来た。大図研ネットワークの威力である。

<おわりに>

一身上の都合から今年6月で36年余の勤めに終止符を打った。欠点も多く、私に対する批判もいろいろあると思うが、自分としては多くの先輩や仲間を支えられて図書館活動や民主運動に精一杯頑張ったので悔いはない。私を育ててくれた大図研の仲間とは今後もお付き合いをお願いしたいと思っている。今迄は図書館を内側から見て来たが、今後は利用者として外側からも見ていこうと思う。幸い京都府立総合資料館のすぐそばに最近引っ越した。「京都御苑への『迎賓館』建設に反対する連絡会」の事務局でもあるので、しばしば資料館で調べ物をしている。

最後に36年の図書館生活の感想を一言。ライブラリアンという職業は、どんな個人的な趣味でも深く追及すれば、それが仕事にも役立つという実に恵まれた職業だということである。学生時代のドイツ語、資本論、文学、カトリック寮での生活、就職してからの組合活動、民主運動、源氏、すべて図書館活動に役立った。

また、一人で学べること、出来ることには大きな限界があるが、多くの仲間と連帯すれば急速に成長することが出来るし、多くのことを成し遂げる可能性が生れてくる。だから大図研は重要である。そして大図研の良さを吸収する最良の方法は積極的に参加することである。(たけもと・ふみお/元同志社大学人文科学研究所)

目次	同志社に36年3ヵ月勤めて (竹本文夫) …… 1頁
----	-------------------------------



「大学図書館問題研究会：京都」へのご意見はお近くの支部委員か、または京都橘女子大学図書館；小林 (NIFTY-Serve:PXK01651) まで。